

# 化学教育 徒然草

## 私にとっての 「化学と教育」誌

KAMATA Masahiro

鎌田正裕

東京学芸大学 教授  
前 国際関係小委員会委員長



巻頭言

私が初めて本誌を知ったのは今から30年ほど前のことで、まだ鳥取大学の工学部に勤務していたころであった。当時の私の専門は固体電解質系の電気化学で、小学校や中・高等学校の教育は興味の対象外であった。

ある日、東京出張の帰りに秋葉原に立ち寄り偶然放射線測定器の組み立てキットを見つけ購入した。大学に戻って組み立ててみると、感度は低いがそれなりに使えるものであった。そこで、大学から車で1時間以上かかるが、三朝温泉という国内で最強クラスの放射能泉があるので、その泉水を測れば何か面白いことが（非常に安価に）できるのではないかと考え、取り組み始めたのが、私が教育の世界に足を踏み入れた第一歩であった。

初めは、泉水を汲んで測定器で測ればすぐに結果が出ると考えていたが、実際にやってみると強放射能泉といっても、そのまま安価な測定器で検出できるほど多くの放射線を放出しているわけではないので、これは無理であった。そこで、泉水から放射化学的手法によって鉛214やビスマス214といった放射性核種を集め、これを組み立てた測定器で測定することにした。その結果、上記の核種が減衰する様子が、一定の精度で測定できることがわかり、これを投稿したのが本誌（鎌田正裕、中村麻利子、江坂享男、第42巻第4号、1994、pp.286-291）であった。それまで教育論文を投稿した経験はなく、しかも、工学部の教員の目には自分で書いた論文に新規性が感じられなかったので、恐る恐る送ってみたというのが正直な気持ちだった。査読結果を見ると、担当者からは、「まさに化教誌にふさわしい研究」という高い評価をいただき、今から思えば、この一言が、私が教育の世界に身を置くきっかけになったと思う。

その後、本誌には数多くの論文を投稿し、中には辛辣な意見を付されたものもあった。私自身も査読を行う立場になることが多いので、よく理解できるが、教育論文の場合、新規性や教育的有用性という視点から主観を排除することは難しい。しかし、上に述べたように、査読者の一言が投稿者のその後に大きな影響を与えることもあるわけで、自戒の念を込めて査読意見を書く際には慎重さを求めたい。そして化学と教育誌には、これからも多くの教員を導くものであって欲しいと願う。

[連絡先]

184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1 (勤務先)